

フットボールはつまらなくなつたのか
三村伊吹

イギリスで生まれ、いまや世界を虜にしているフットボール。その勢いはとどまることを知らず、二〇二五年現在もますます人気に拍車がかかつており、観客動員数は増え続け、市場規模も大きくなり続けている。しかし、そんな人気絶頂のフットボールであるが、近年こんな意見を耳にすることがある。「フットボールはつまらなくなつた」と。

元選手や記者、果てには観客でもこの言葉を口にして、いる人が少なくないように感じる。一体どうしてこんなことを言う人が出てきたのだろうか。

ある元選手は、皆をあつと驚かすようなプレーをする選手が減ってきていると発言している。これを聞いて、まず思いつくのはリオネルメッシとクリスティアーノロナウドの衰えについてだろう。現代フットボールの象徴的存在ともいえるこの二人の名前はフットボールになじみのない人でも一度は耳にしたことのある名前なのではないだろうか。二十一世紀のサッカーをけん引してきたこの二人であるがメッシは三七歳、ロナウドは四十歳とスポーツ選手として、その能力に衰えを隠し切れなくなつてきてい

る。実際、この二人は数年前からフットボールのメイン舞台である欧州から離れた地で過ごしている。しかし、世界的スターの衰えはいつの時代もあったはずだ。メッシやロナウドの前はロナウジーニョやベッカムなど、その前も、その前の前も歴史に名を遺した選手たちが消えていくと同時に、新たなスターが誕生し続けていたはずである。

では、現在はどうかだろうか。ネクストメッシやネクストロナウドと謳われた選手は数多くいたがどれも代替わりには失敗している。この二人が偉大過ぎた影響もあるかもしれないが、どの選手も時代を象徴するには小粒と言わざるを得ないのが現実だ。ところが、今の選手のレベルが低いのかといわれるとそうではない。逆に選手の平均レベルや総合的な能力では現代の選手の方が高いのは確実だ。であれば、なぜフットボールがつまらなくなつたという人が現れているのだろうか。

これを理解するために、まずフットボールの何が面白いのかを考えることにする。フットボールにおいて盛り上がる場面というと、思い浮かぶのはゴールのシーンだろう。特に試合終盤の逆転弾や、勝負を決定づけるゴール、選手の質などで、明確な実力差がある格上の相手に決めるゴールなどは、会場が

割れんばかりの大歓声に包まれる、フットボールの醍醐味の一つだろう。このようなシーンの共通点として考えられるのは、観る者の予想を裏切るようなシーンだということだろう。劇的なシーンにおいて海外の実況者が「アンビリバボー！」と言っているのをよく耳にするが、読んで字のごとく信じられないような現象を目の当たりにしているのだ。これはスポーツ全般の魅力ともいえるかもしれない。観客のこうなるだろう、という予想を選手たちの高度な技術や身体能力で裏切るプレーは、観る人をあっと驚かしワクワクさせるものなのだ。

だが、近年のフットボールではそのような驚くべき結果は発生しづらくなっている。メッシとロナウドが台頭し始めた二〇〇六年シーズンと二〇二四年シーズンのスペインリーグ上位3チームの平均敗北数を比べてみると、二〇〇六年は七敗、二〇二四年は四敗と明確に少なくなっている。(スペインリーグを対象にしたのは両年の欧州チャンピオンがスペインのクラブだったためである) 上位チームの敗北が少ない、すなわち上位チームが下位チームに負けること、予想を覆すような結果が少ないといえるだろう。これは、フットボールの戦術が進化した影響だ。ここからは少し、戦術的な部分について語ろうと思う。

フットボールにおける戦術とは、勝利の再現性、要はゴールの再現性のことを示す場合が多い。戦術は大きく二つに分けられる。堅守速攻のカウンターと、ボールを保持し続けてゴールまで運ぶポゼッションだ。この二つの戦術を理解するためにまず十一人の配置について知っておいてほしい。ボールの動きによって流動的に変化することはあるが、初期配置ではゴールキーパーを除く十人を三列に並べることが多い。後ろからディフェンダー、ミッドフィルダー、フォワードだ。列ごとに役割があり、ディフェンダーは守備、フォワードは攻撃、ミッドフィルダーはその両方を担う。守備時は後方の二列で防衛線を敷き、最前線が遊撃、攻撃時は前方二枚で波状攻撃を仕掛け、一列がリスクケアで守備に徹するといった形だ。

まず、比較的にわかりやすいカウンターから解説していく。カウンターでは相手の攻撃を受けとめて、手薄になった守備陣に速攻を仕掛ける。カウンターの強みは前線二列がない状態で攻撃を仕掛けられる点である。少ない人数で攻撃を完結することができるので、二人ほど才能を持った選手がいれば、基本的にどんな相手でもゴール脅かすことが可能となる。資金力などの差で、他のクラブと比べて

質の高い選手を獲得するのが難しいクラブであつても、勝利を拾える可能性が少なくない戦術といえる。また、選手の質の高いクラブでは、前線から追い込み漁のような守備をすることで、能動的にカウンター状況を作り出す、応用的なカウンター戦術もある。この戦術では、前線からボールを奪いに行くと、自然とゴールの位置が近くなり、チャンスも増えて勝利の可能性を大きくすることができ、強者のカウンターともいえるだろう。

一方、ポゼッションはどのようなものかという点、攻撃は最大の防御を実現しようという戦術だ。理屈としては、相手にボールを渡さなければ、ゴールを奪われることがないから負けないよね、といった寸法だ。フットボールについて明るくない人には、パスサッカーといわれた方が聞きなじみがあるかもしれない。しかし、この戦術はとても難しいといわざるを得ない。まずボールを奪われないことが難しいのだ。そもそも相手との人数が同じであるため、極論だが、全員に対して一対一対応でマークに置くことができるのだ。さらに、勝利するためにはそのマークをかくぐってゴールに迫らなければならぬ。ゴールに近づけば近づくほど、窮屈になつてプレーが難しくなるのは想像に難くないだろう。だが、戦術が発達するにつれ、この問題を解決する

方法が確立されていった。それがビルドアップである。

ビルドアップとは、後ろから攻撃を組み立てることを意味しているが、その本質は相手を引き込んで、カウンターの速攻時と同じ状況を作ることにある。リスクは大きいが、攻撃を受けて、ただカウンターの機会を待たなければならぬカウンター戦術より強いのは容易に想像できる。この戦術の弱点は、ピッチに在るすべての選手に高度な技術を求められるということだ。

現代フットボールでは、ビルドアップが最強の戦術として君臨しており、いかに質の高いビルドアップを実現するかが、多くの勝利を勝ち取るためのカギとなっている。

ビルドアップが現代での最強の戦術という話をしたが、この戦術を採用しているクラブは多くない。やはり、高度な技術が必要になるのがネックとなっている。高度な技術を持った選手を揃えることができる、お金の多いクラブが、強い戦術を使うことができる。強い戦術を使うクラブが、多くの勝利を手に入れる。より多く勝つクラブは人気になりスポンサーや観客からの収益も他のクラブより多く、そのお金で、さらに質の高い選手を揃えることができ

る。こんな調子でその格差は広がり続け、選手の揃わない他のクラブはカウンターなどの勝利への可能性が高くない戦術を使わざるを得なくなってしまうわけだ。

このような格差の広がりの影響で、実力差のある対戦において、予想外の結果が起きづらくなっているのではないかと考える。では、本当にフットボールはつまらなくなっているのだろうか。

確かに、予想外の結果は起きづらくなっているかもしれないが、勝利するクラブがあるということだけは、ゴールは生まれているということだ。そして、たとえ強いクラブが弱いクラブ相手にゴールを決める際にも、必ず何かしらの予想の裏切りは起こっているはずなのだ。先ほど、三列の配置について知ってもらったが、ビルドアップの後ろからパスをつなぐという特性上、三列そろった状態の相手と対面しなければならぬ。三枚の防衛線をかいくぐったうえで、ゴールキーパーを出し抜いて、やっとゴールが生まれるのだ。要するに、少なくとも三枚の防衛線とゴールキーパーのした、予想（ここでは予測といたった方がいいかもしれない）の裏切りが発生しているのだ。そこには、戦術的な意図に基づいて振るわれる高度な技術があるはずだ。

ここから、このようなことが予想できないだろうか。「フットボールはつまらなくなったのではないかと、わかりにくくなったのだ」と。

将棋やチェスの盤面を見ても、ある程度の知識がなければ、何が起きているのか、何がすごいかわからないだろう。それと同じように、戦術を知らない状態では、気付けない妙手や地味なスーパープレーが数多く発生しているのではなからうか。

戦術が進化し、選手一人一人のタスクが増えているはずだが、選手たちの平均レベル上がっていることで、今までの選手ではできないようなプレーも淡々とこなしてしまい、そのすごさに気付いていないだけかもしれない。それを考慮せずに、つまらなくなったと一蹴してしまうのはナンセンスだ。

フットボールが好きなら、フットボールを愛しているなら、どんな時代でも、その面白さを見出し、楽しんでいきたいものだ。